高校二年必修総合人間科

「国際理解・人権・平和」の取り組み

「TT（教官チーム）による授業」と「ディベートによる沖縄学習」

高二担任団
山田　孝・斉藤真子
仲田恵子・鈴木一悠
川合勇治・加藤容子

【抄録】TT（教官チーム）による授業の目的は、学年テーマ「国際理解・人権・平和」を沖縄学習に具体化したものでありフィールドワークの個人研究テーマ例を提示するものであった。また「沖縄の米軍基地は撤廃すべきである」の論題でディベートに取り組み、一人ひとりが多面的視野から問題を認識し、賛否両論の立場をふまえて自分の考えを形成し、発表・討論する力を高めることができた。

【キーワード】ディベート　TT（教官チーム）による授業　必修総合人間科　沖縄学習　国際理解　文化　人権　平和　環境　産業

1．TT（教官チーム）による授業

Ⅰ．はじめに

1995年、必修総合人間科が各学年とも学年テーマに沿って展開された。高2の学年テーマは「国際理解・人権・平和」であった。オリエンテーションの後、3回に分けて担任団から、学年テーマの説明（テーマの範囲内にある小テーマの提出）を行った。沖縄で研究旅行を実施する関係で、小テーマ提出は当然、沖縄と結びついた沖縄の抱える問題の提出となった。小テーマは人権・産業関係を山田・加藤が、国際理解・文化関係を仲田・斉藤か、平和・環境関係を川合・鈴木が受け持った。6名とも、テーマ説明は各クラスに対して1時間ずつという極めて圧縮した形の説明となった。生徒達は、担任団からテーマ説明を受けた後、グループ研究・個人研究のテーマ検討・決定、ディベイトによる沖縄学習、沖縄現地でのグループ研究・個人研究、まとめ、発表と進んだ。

Ⅱ．TT（教官チーム）による授業の内容

(1) 環　境　　担当　鈴木一悠

テーマ説明は授業の形態で行った。「私は沖縄戦のことは知らない。本土の経験した太平洋戦争は、少しだが覚えている。私が沖縄に直接関わったのは、沖縄返還運動（沖縄の人達から言えば、沖縄本土復帰運動）においてである。1972年沖縄は日本に帰ってくるが、自分がいつも感ずるのは「沖縄の人達は本当に日本に復帰してよかったのだろうか」という思いである。日本に属していたばかりに太平洋戦争で住民が戦争に巻き込まれた（本土の人間の側から言えば、意図的に巻き込んだ）この日本に。そこで、以後の話では、沖縄の人達と本土の人間はどこが同じでどこが違うのか、両者の間にはどういう違いがあるのか或いはないのかを観点に話したい。

話す内容は

1．沖縄の人達の由来――本土の人間とどこが違うか
2．沖縄の人達の歴史――本土の人間とどこが違うか
3．沖縄の人達の自然に対する考え方――本土の人間とどこが違うか

最初に　1．沖縄の人達の由来

言語の方からは、沖縄の言語と本土の言語とは方言の違いであって、日本語としては1つである。それ以上の違いはないことが分かる。（図1）

次に遺伝的形質の方から沖縄人の由来を調べた。Newton 1993/May によれば、人種はネグロイド（黒色人種）コーカソイド（白色人種）モンゴロイド（黄

色人種）の３つである。沖縄の人達も本土の人間もモンゴロイドである。さてモンゴロイドはスンダランドが拡散の中心地であったらしい。沖縄県那覇市近くで「港川人」が見つかった。那覇市近くであるから、「港川人」は現在の沖縄の人達と深い関係があると思われる。この港川人（南方系モンゴロ、原モンゴロイド）は、北海道から沖縄まで日本列島全域に住んでいた縄紋人の祖先であると考えられている。縄紋時代までは、日本は、北海道から沖縄まで、構成した人間の由来にしても展開された文化にしても、差がなかったものと思われる。2300年ほど前、大陸から「渡来系弥生人」（北方系モンゴロイド、新モンゴロイド）が入って来た。そして北九州から東に向かって勢力を伸ばした。ここに至って沖縄の人達と本土の人間との間に違いが現れたようた。日本人は、アイヌ、沖縄の人達と東北から九州までの人間の２つに分かれるというのた。これは、「渡来系弥生人」が北九州から東に向かって勢力を伸ばしてゆくとき、混血が進んでいったが、沖縄と北海道は混血の行われかたが少なかったということであろう。（図２）

耳あかの乾いている、湿っているの研究もある。これによっても、沖縄の人はメラネシアのような沖縄よりも南に住む人達に近く、本土の人間はツンクースのような本土よりも北に住む人達に近い。（図３）

次に　２．沖縄の人達の歴史

図て、日本本土の流れと琉球沖縄の流れとが、初め分かれており琉球処分でくっつくが、しかし１つの流れとはならす依然として２つてあることは、著者の沖縄に対する見方（考え方）の反映てあろう。（図４）沖縄の人達が歩んた歴史の最大のポイントは、古琉球の時代、沖縄が本土とは別の国家であったことてある。すなわち第一尚氏王朝、第二尚氏王朝なかんすく後者の時代には琉球王国が存在していた。この国の国策は貿易立国てあり、広範な地域と交易を行っている。本土とも交易しているが、本土は交易国の１つてしかない。そして交易した地域の大部分は本土よりも南にある。この交易が、沖縄の文化を育んたものと思われる。（図５、図６）

最後に　３．沖縄の人達の自然に対する考え方

沖縄の人達の自然に対する考え方が如何なるものか、本土の人間のそれととう異なるのか或いは同じなのか、現在の私には分からない。したかって環境の問題を、この、沖縄の人達と本土の人間の自然に対する考え方の異動の力から考えることはしない。沖縄の環境の問題は広いが、単にサンゴ礁の問題たけを取り上げる。

サンゴ礁-----

サンゴ礁生態系を構成する

多くの生物の生息場所、繁殖場所である

二酸化炭素の吸収される場所でもある

日本のサンゴは、沖縄の本土復帰後90％以上死滅させられた。原因は埋め立て、土砂の流入、オニヒトデの大発生なとであるが、いずれも開発が原因である。（図７）

上記のことく分担であった環境については、およそ充分なテーマ説明ができていない。さて生徒達のクループ研究・個人研究は、生徒達の残した「沖縄研究旅行録」に見ることく、テーマは広範囲にわたっているが、よく行われていると言ってよいであろう。してみると、担任団が分担して行ったテーマ説明は、生徒達のテーマを決定し、研究を実行する上で呼び水くらいにはなったのであろう。

文　　献

テーマ説明の中で引用させていただいた図の所載文献は次の通りです。

図１　新崎盛暉ほか９名　新版観光コースでない沖縄　高文研　1990年　p.24
図２　Newton 1993/May 教育社　p.86
図３　同上　p.87
図４　高良倉吉　琉球王国　岩波書店　1993年　p.40
図５　同上　p.83
図６　同上　p.86
図７　Newton 1989/August 教育社　p.30

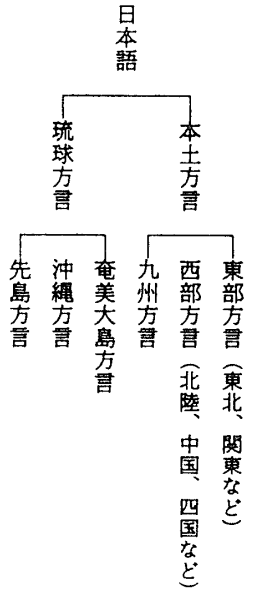
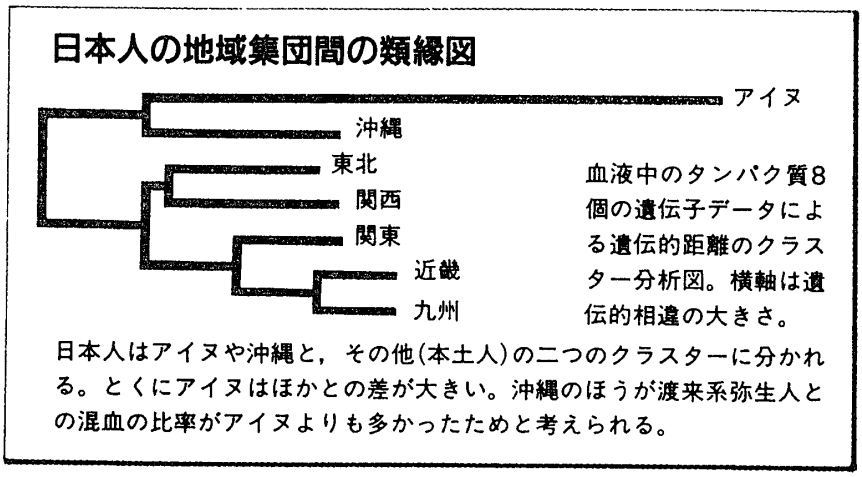
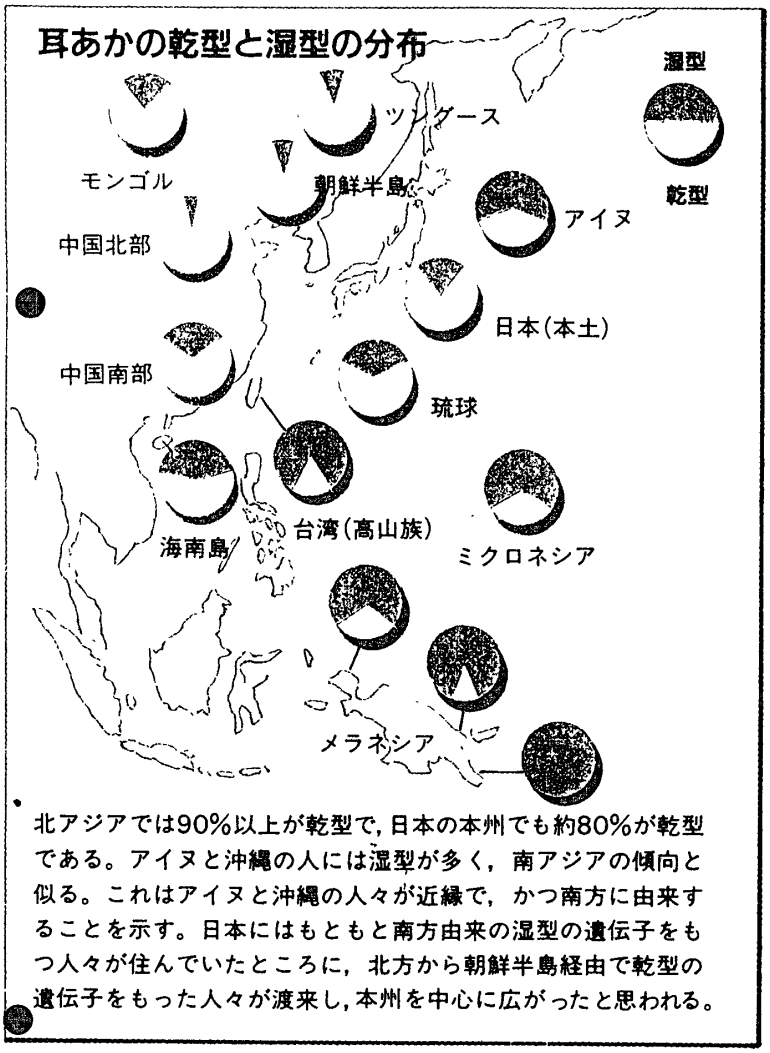


図１



（尾本惠市より）

図2



（尾本惠市より）

図3

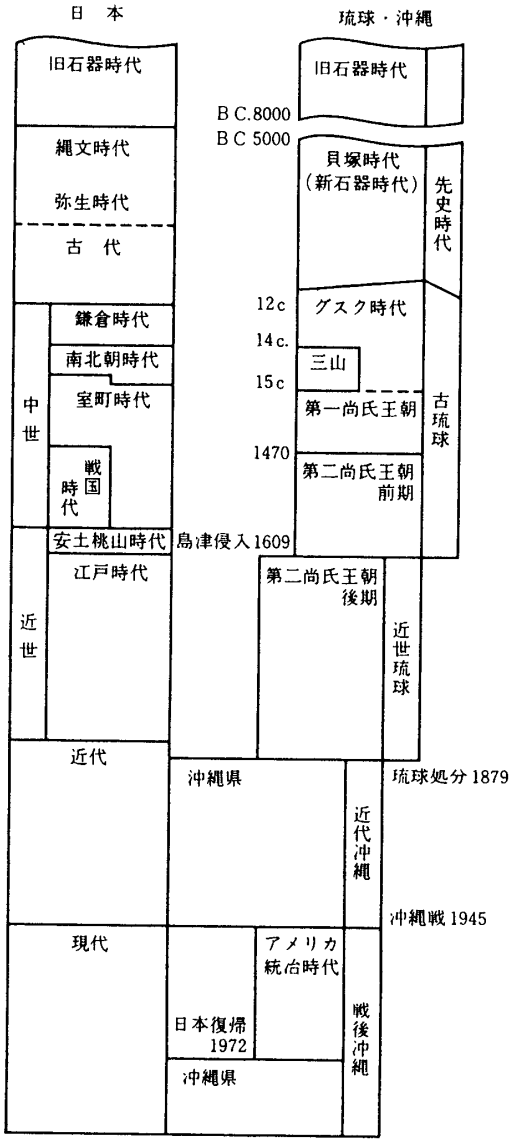


図4　琉球・沖縄および日本の時代対照図

琉球国は南海の勝地にして、三韓(朝鮮)の秀を鍾め、大明(中国)を以て輔車となし、日域(日本)を以て脣歯となす。此の二の中間に在りて湧出するの蓬莱島なり。舟楫(船舶)を以て万国の津梁(かけ橋)となし、異産至宝は十方刹に充満せり。

わが琉球は南海のすぐれた地点に立地しており、朝鮮のすぐれた文化に学び、中国とは不可分の関係で、日本とも親しい間柄にある、わが国は東アジアの中間に湧き出た蓬莱島のようなものだ、貿易船をあやつって世界のかけ橋の役割をはたし、国中に世界の商品が満ちあふれている、というのである。このような文句を記す梵鐘を、寺院にではなく、首里城の正殿にかけたのであった。中継貿易国家としてアジアの海にはばたいた琉球王国の自負を、みごとに表現した名文句といえようか。

図6

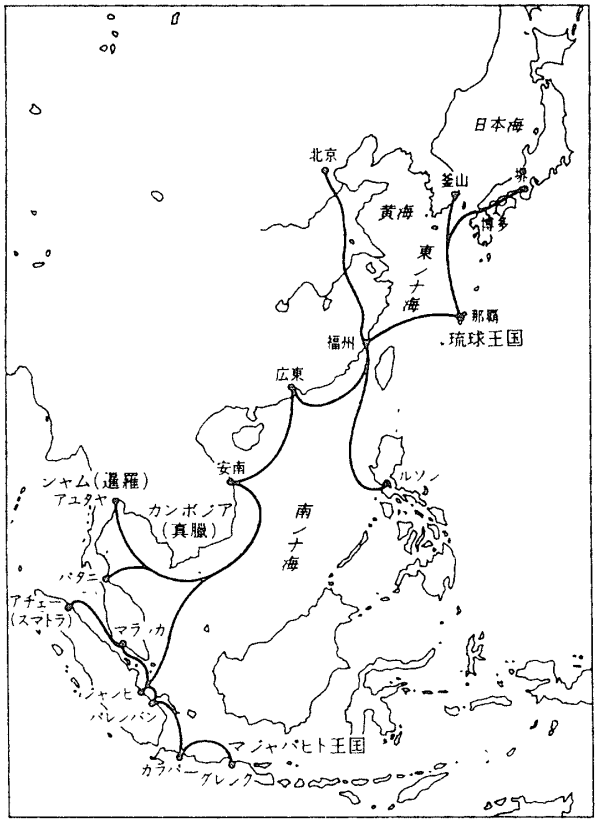


図5 琉球王国交易ルート 近世中頃に編集された琉球王国の外交文書集『歴代宝案』などにより作成．同文書集によると，東南アジアに派遣された琉球船は，シャムの58隻を筆頭に，マラッカ20隻，パタニ11隻などであった(1425年～1570年) これは記録に残ったものだけであり，実際にはもっと多かったものと推定される なお 福州から北京までは大運河ルートが使われた

人間活動によってダメージを受けているサンゴ礁

現在，日本ばかりでなく世界中のサンゴ礁が人間によって危機的状況に追いこまれている。国際サンゴ礁シンポジウムで報告された場所を中心に，人間活動がサンゴ礁に影響をあたえている地域を赤い丸で示した（中井達郎 1989による)。大きな丸は広域にわたって報告があるところである。

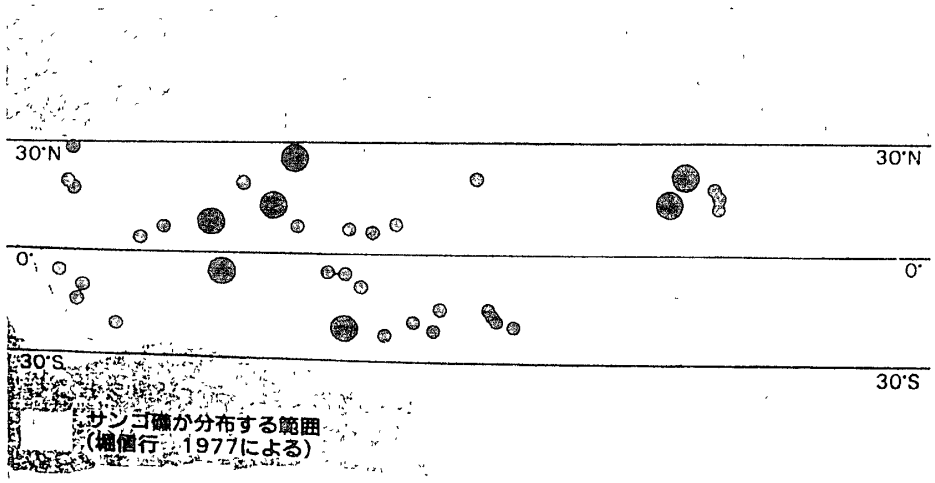


図7

(2) 平　和　　担当　川合勇治

・テーマ：沖縄から平和について考える
・ねらい：特に沖縄戦についてとりあげ、そこで起った事実を知らせ、沖縄戦の背景や意味について考えを深める。
・内　容：まず、沖縄戦の概要について触れ、その後ビデオ「未来への証言」（25分程度）を鑑賞し理解を深めた。最後に、沖縄戦の意味や問題点について検討し50分間の授業を終了するというものであった。

(3) 人権から考える沖縄基地問題　　担当　山田　孝

1．授業の目的

この授業で目的としたことは、

人権とはなにか

沖縄と基地との関係

について、理解を深めることであった。そのために、人権についての歴史や基地の歴史的背景を学んで、現在の沖縄の問題に迫ろうとするものである。そこから、沖縄学習の意義を再確認しようと試みた。そして、具体的に米軍基地が引き起こす人権侵害の事例から考えてみることにした。

2．沖縄の基地を人権問題からとらえる。

昨年、九月四日に発生した米軍人による女子小学生暴行事件により、沖縄の米軍基地への関心が一気に高まり、今では過去に発生した問題も明るみに出されるようになった。とは言っても本土ではあまり報道されなかった事実が報道されるようになったことだけだが。

関心が高まる以前、教員チームによる授業を計画した4月・5月の時点では、沖縄の米軍基地についての具体的な資料（統計的資料など）や事件・事故の資料などが手に入らなくて苦労した。しかたなく、具体的でインパクトのある資料として沖縄でなく、横浜の米軍機墜落事故を題材にした「パパママバイバイ」を読むことにした。また、沖縄の米軍人による犯罪を扱った歌、「ガソリンまみれのオートバイ」を聞いて、歌から沖縄の基地問題について考えた。

日本全土の米軍基地の統計資料としては、横浜弁護士協会編「基地と人権」を参考にした。この本からは、米軍基地が抱える法的問題も考えることができた。

3．実際の生徒の基地についての意識

授業の最初のアンケートより

米軍基地についてどのくらい知識を持っているのか、授業前に簡単なアンケートを行ってみた。

日本にある米軍基地について。第1回の授業では日本に米軍基地は、いくつぐらいあるかという具体的に数を聞く質問を行ったのだが、この質問では全く見当すらつかないことがわかったので、2回目の授業からは質問を変える事にした。

米軍基地の数について

10未満　10　30　50　100　100以上から選ばせることにした。

その結果、10未満が2人、10が4人、30が21人、50が18人、100が11人、正解である100以上と答えたのが14人という結果であった。多くの生徒は、米軍基地のおおよその数もわからない状態であった。

さらに、この米軍基地がどのくらい沖縄に集中しているかも聞いてみた。

30％4人、40％9人、50％6人、60％21人、70％以上62人。約過半数の生徒が正解ということになる。

日本の米軍基地や沖縄の米軍基地について、具体的な事実についてあまり詳しく知らないと言うことがわかった。なぜ、具体的に知らないかというと、生徒の身近な生活の中で「基地」を感じることがないからであろう。実際に、「身近で基地を感じることがあるか」という問には、ほとんどの生徒が「感じない」と答えている。だから日常生活の中では、基地というものに意識を払ったことがないことになる。では、基地があることによってどんな問題が生じるのか。この点については、ある程度予想することができたようであり圧倒的に多い答えが、「環境問題」であり具体的には「騒音」であった。また「危険」と指摘する意見も多かった。基地に関する「事故」や「流れ弾」の問題などもあった。

4．授業の展開

授業の導入として、アンケートを実施して、具体的な米軍基地の実態にふれた。この米軍基地により、どんな問題が発生しているのか考えて、意見を発表させた。さらに、具体的にどんな事件が起きたのか二つの事例を紹介した。

一つが、横浜の米軍機墜落事故で、この事件を扱った絵本「パパママバイバイ」（早乙女勝元著　草土文化社）からの後書きの部分を読み合わせした。

もう一つが、「ガソリンまみれのオートバイ」という曲で、これは米兵による犯罪を扱った歌である。

二つの事例を紹介して、この具体的事件から米軍基地の持っている、人権侵害について考えようとした。人々が安心して生活できないことが、すでに多くの人の人権＝生きる権利を妨げている事実に到達することがこの授業の目的であった。

さらに、人権の概念までおさえようと計画も立てたのだが、1時間の枠の中では事実をおさえるだけにとどまってしまった。

5．生徒の感想文より

生徒は、この授業にとう感じたであろうか。1人の生徒の感想文を紹介する。

「パパママハイバイ」は幼稚園のころ、母と映画を見た覚えがあります。たけと背景に米軍基地があったとか、海上自衛隊は米兵を助けたシーンのなかにはでてきたのだと思いますが、きっとあの頃の私には理解てきなかったのでしょう。(省略)

米軍基地は何のためにあるのか。どのようなことをしているのか。二度とあのような惨事が起こらないように、私たちはもっと興味を持ち追求していくことが必要ではないかと強く感じました。

この基地の学習が、一応背景となって9月のディベートの授業「沖縄の米軍基地は撤廃するべきである」につながっていた。

(4) 産　業　　担当　加藤容子

沖縄の食文化

高校2年生ての総合学習のはじめとして、まず生徒に沖縄についての興味・関心を持たせること、生徒がグループテーマや個人テーマを決めていくうえで参考となるような知識を与えることを目的として、教師が2人で授業を行った。

「人権・産業」というテーマの産業の部分を担当することになった。基地産業、観光産業、農業等いろいろな題材が考えられたが、生徒が興味・関心を持ちやすく、授業者が養護教諭であるという立場から、本来の産業のイメージから少し離れて、「沖縄の食文化」と題し、沖縄の食生活と長寿との関わりを中心に授業をした。

授業の流れ

○名古屋名物の食べ物と沖縄の食べ物をあげる。
- 名古屋…きしめん、みそ煮込、天むす、ひつまぶし、ういろ、みそかつ。
- ※「ういろ」と「ないろ」の違いについて解説する(山田)
- 沖縄…ラフティー、ミミガー、ゴーヤー、チャンプルー、沖縄豆腐、へちま…。

○「沖縄を味わう」を読み沖縄の食文化の概要を知る。
(新崎盛暉他著『沖縄修学旅行』高文研より抜粋)

○都道府県別平均寿命を見る。
- 沖縄県の平均寿命が高いのはなぜだろう。
- 食生活との関連から見てみよう。

○沖縄に学ぶ長寿食のポイント。
- 豚肉の消費が多い。
  成人病のリスクファクターとの関係。
  長寿と動物性タンパク。
- 豚肉の食べ方。
  長時間煮て飽和脂肪酸を捨てる。
- 昆布の消費が多い。
  北海道との交易。ミネラル。
- 塩分の摂取量がずば抜けて少ない。
  成人病との関連。
- 沖縄豆腐
  植物性タンパク
- 緑黄色野菜をたっぷり摂る
  ニガウリ(ゴーヤー)、ヘチマ、ユウガオ…。
  県民の食物繊維、カルシウム、鉄、ビタミンA群なとの摂取量は1日の栄養所要量をはるかに上まわる。

○独特の食文化に支えられた寿命も、食生活の変化により変わりつつある。

(5) 沖縄学習における国際理解　　担当　仲田恵子

国際理解の観点から沖縄について学習する場合、まず第一に加害者の立場から沖縄戦を考える必要がある。広島と長崎をはじめ全土で被った戦争の被害については理解しやすいか、加害については間接的なものもあり分かりにくい。

そこで歴史を振り返ると、当時日本がアジア諸国の一員でありながら、近隣諸国から太平洋地域にかけて侵略し多大な損害を与えたこと、大東亜共栄圏という美名のもとにアジア諸国を蔑視する思想が支配的であったことなどから、加害者としてアジアに君臨していた日本人の実像が浮かんでくる。

授業の狙いは、国際理解の認識を深め、国際協調の心を養い、共存共栄をはかることてある。現代においても、欧米寄りの見方や考え方をする一方、アジア蔑視が依然として根強い。このような見方、考え方は国際平和の実現を阻害するので、改めなければならない。偏見をなくし、自分と同じく周りの人も差別されることなく、生命と人権を尊重され、住み良い環境を共有し、平和に暮らすことができるように努力しなければ国際理解は進まない。沖縄学習において被害と加害を正しく認識することが国際理解の一歩であると考えられる。

授業では、沖縄県民や他民族に対する差別と虐殺を

中心に、国際理解について考えた。日本軍が沖縄を戦略的に利用し沖縄住民を犠牲にしたこと、また、アジア近隣諸国の人々をも犠牲にしたことを学び、当時の日本軍を米軍と比較考察した。「ヌチドタカラ」（命こそ宝）という沖縄の人々の考え方は踏みにじられ、自決や皇民化教育が強要された。また、朝鮮・韓国の人々は、朝鮮人強制連行、強制労働、従軍慰安婦などを強いられた。

題材として、書籍と英字新聞を用いた。比嘉富子著「白旗の少女」では、壕での生活、日本軍が住民に教えた鬼畜米英の偏見、沖縄の人々の「大和人よりもアメリカ人を信頼できる」という敵国人への人間としての信頼、少女が旗を持って壕から出ていったときの米軍の人道的対応などを作品を通して学んだ。英字新聞では、元米兵の語った沖縄戦体験談を読み、米国側の沖縄戦に対する考え方や当時の沖縄の状況について学んだ。

資料１

生徒の個人研究のテーマの参考として資料を作成した。次に挙げたものは「沖縄文化と国際理解」関連の個人研究テーマの参考として配布した資料に含めたキーワードである。

沖縄の神話　オモロ　おもさうし　創世神話　神観念　沖縄語　文学の中の方言　風土記　沖縄文学呪祷文学　叙事文学　叙情文学　劇文学　音楽文学　村の祭り　沖縄諸島の年中行事　芸能　民俗芸能　沖縄の美学　美術　染織　沖縄の酒　陶芸　漆芸　建築　亀甲墓　命こそ宝　チビチリガマ　シムクガマ　敵国人への人間としての信頼　白旗の少女　自決の強要　皇民化教育　「日の丸」　戦後の日の丸　天皇制絶対主義時代の教育　教育行政　教育勅語　「御真影」　沖縄県民・他民族の虐殺　沖縄県民に対する差別と偏見　アジア人差別　韓国人蔑視　朝鮮人強制連行　強制労働　従軍慰安婦

資料２

戦後50年ということでハワイの地元新聞に、沖縄戦を体験した元米兵が激しい戦闘の模様を語った記事が掲載された。その記事と要約を参考資料として読んだ。以下は、授業で扱った部分の要約である。

「沖縄戦、今も記憶に残る畏怖：陸海空の激戦」

ジョージア州在住のデズモンド・ドス氏は、1945年当時20歳であった。ドス氏は敬虔なクリスチャンで、キリスト教の戒律である「殺してはならない」ということを信念としていたので、武器を持つことを拒み、軍衛生兵として参戦した。そして沖縄の地でドス氏は多くの人命を救った。（中略）

２年半の間、米軍は日本に向かって島から島へと戦い進んでいった。ガダルカナルからタラワ、サイパン、グアム、ペリリュー、硫黄島と進んだ。どこにおいても日本軍は敗北が明らかな時でさえ降伏しなかった。彼らの武士道の決闘の作法はまず死を命じた。多くのアメリカ人が日本人と共に死んだ。硫黄島での戦いでは７千人のアメリカ人の命が失われた。

だれも沖縄へ行きたいと思うものはいなかった。米軍の島飛び作戦において沖縄は最後から１つ手前の目的地であった。最後は、作戦によれば、本土であった。（中略）

アメリカ機はパイロットの操縦技術が優れていたのに加えて、スピードが速かった。またアメリカ機には防御板がついていた。つまり、座席の後ろに５センチの厚さの鋼板がついていた。一方日本のカミカゼ戦闘機は座席の後ろは爆発しやすい燃料タンクしかなかったのである。（中略）

このとき陸上では第二次世界大戦の中で最も恐ろしい陸戦が展開されていた。海空戦では５千人のアメリカ兵が殺されたが、陸戦での死者はさらに多く、７千人の兵が殺された。日本側は少なくとも７万の日本人が、８万の沖縄住民と共に死んだ。結局沖縄戦ではアメリカ側に３万２千人の死傷者がでた。

グアム島、レイテ島で活躍したドス氏は、今度は沖縄で負傷兵の手当てに明け暮れた。戦火をくぐって一人また一人と味方の負傷兵を安全な場所に引きずってきては手当てをした。（中略）

ドス氏は語る。「引き上げろという命令が下っていた。しかし仲間をおいていくことはできなかった。戦闘ではお互いに親密になる。仲間が撃たれた時、そこに置き去りにすることはできないんだ。ちょうど家が火事になったときの母親のように、自分のことなど考えていない。子供のことを考えているんだ。私は味方のことをそんなふうに感じていた。自分が殺されるとは思っていなかった。もしもう一人助けることができるなら、自分が負傷しても値打ちがあると思った。」

「軍カメラマンのレンズは沖縄を語る」

50年前の沖縄侵略の時、19才のイリノイ出身のカール・モラー氏は大学から引き抜かれて軍の写真学校に通わされ、太平洋に派遣された。

海兵隊は北から沖縄を攻撃したが、モラー氏の属する第７歩兵隊36連隊は南から攻撃した。初めはほとんど反撃はなかった。「我々は島の南から攻撃するというフェイントをかけた、それが多くの日本軍を引き寄せた。」とモラー氏は語る。

初めの頃は沖縄は無人島かと思われた。「全く奇妙な状態たった。初めほとんど人影が無かった。ほとんどの人は洞窟に隠れていて老人や子供ばかりだった。」沖縄島はひとい田舎であった。モラー氏が思い出すのは開発されていない水田ばかりの地である。「何もない所だった。現在の沖縄とは想像がつかない。」

結局日本軍は騙されたことが判って戦いにもとり、戦闘は3ヵ月に及んだ。約3万2千人のアメリカ軍と11万人の日本軍が殺され、あるいは負傷した。

モラー氏が、古い大きなスピードクラフィック4で撮った4×5インチのネガはアメリカに送られ故郷の新聞や雑誌に掲載された。

ホノルルアドバタイサー誌1995年4月2日

資料3

参考文献

「沖縄の歴史と文化」外間守善　中公新書
「沖縄戦記　鉄の暴風」沖縄タイムス社編
「改訂版　沖縄戦　民衆の眼でとらえる戦争」大城将保　高文研
「赤丸の家　朝鮮から来た従軍慰安婦」川田文子　筑摩書房
「恨（ハン）朝鮮人軍夫の沖縄戦」海野福寿　権丙卓　河出書房
「白旗の少女」比嘉富子　講談社

(6) 文　化　　担当　斉藤真子

沖縄の暮らしと文化

1995年は、戦後五十年目の節目の年ということで、沖縄戦の生き残りの方々が本を出版された。その中に本校の沖縄研究旅行の第一日目の夜に講演「母親の立場で沖縄戦を語る」をしていたたいている安里要江さんの「沖縄戦－ある母の記録－」や、第四日目の南部戦跡めくりで講演をしていただいている宮城碧久子さんの「ひめゆりの少女－十六歳の戦場－」（高文研）がある。

安里さんや宮城さんの生き方（人生）の各場面を通して、人々の暮らしの背景にある「沖縄の文化」につなげられたらと考えた。

さて、「暮らしと文化」と、一言でいうが、幅広いものがある。何を取り上げても「文化」であるといえる。

そこで、「沖縄の暮らしと文化」を知るために

(1)沖縄の言葉（琉球方言「方言札」「三音節」「日本古語」）
(2)沖縄の宗教（神と祭りの島　墓と祖先崇拝「亀甲墓」「ウタキ」「ニライ　カナイ」「命とう宝」）
(3)沖縄の音楽（「琉球音階」「ワールドミュージック」「ロック」「花」）
(4)沖縄のこころ（安里要江さんの体験から）
①平凡な母親が11人の家族縁者を失ったことの意味
②風化しない体験談（長い間、生々しくて語れなかった）③「轟の壕」での、乳飲み子「和子」の死④現在、75歳。（今しか語れない）

の四点を取り上げた。

11月の研究旅行で安里さんや宮城さんの「講演」を聞くのでその事前学習の意味も含まれている。

第一日目のアブチラカマての漆黒の闇を体験した後で、安里要江さんのお話を聞くと、沖縄戦当時の「轟の壕」での出来事がまさまざと目に浮かぶのである。

Ⅲ。おわりに

高二の必修総合人間科の事後アンケート結果から、TT（教官チーム）による授業とディベートの取り組みが、どのように生徒に受けとめられたかをみてみると次のようであった。生徒数112名（　）は実数

4月　オリエンテーション
5月　(15)TT（教官チーム）による授業
　　(12)事前学習プリントによる沖縄学習
6月　(22)フィールドワーク「学ぶことから学ぶ」
　　植田先生の話
7月　(30)個人研究テーマ決め
9月　ディベートの準備
10月　(73)ディベート「沖縄の米軍基地は撤廃すべきである」
11月　(74)班でタクシーによるフィールドワーク
12月　(25)研究集録のまとめ
　　(21)班ごとの研究発表会
1月　(26)個人研究発表会
2月　(11)高一への研究旅行報告会

さて、総合人間科で「沖縄の米軍基地は撤廃すべきである」の論題でディベートに取り組んだことは、個人テーマを持って班でフィールドワークをしたこととともに、一人ひとりの能動的な「学び」であり、「学びを学びつつ自ら学ぶこと」であった。また自分自身がそのことを実感できた。そして、生徒自らが積極的にディベートに取り組み「倫理的思考力」や「表現力」を高めることができた。

一方、TT（教官チーム）による授業は、学年テーマの説明と個人テーマの提示例としての意義は大きいが、生徒にとっては、受身的な授業形態に不満が残ったのであろう。

今後の課題としては、TT（教官チーム）に生徒が参加する形態をとるのも一つの方法である。